

「とぞ見えし」考

——覚一本『平家物語』における無常観の一表現——

沼 波 政 保

はじめに

昔より今に至るまで、源平両氏朝家に召しつかはれて、王化にしたがはず、をのづから朝権をかるむずる者には、互にいましめをくはへしかば、代のみだれもなかりしに、保元に為義きられ、平治に為朝誅せられて後は、すゑ々の源氏ども或は流され、或はうしなはれ、今は平家の一類のみ繁昌して、頭をさし出す者なし。いかならむ末の代までも何事かあらむとぞ見えし。^①

言うまでもなく、『平家物語』巻一・「二代后」の冒頭である。昔から源平両氏が朝廷に仕え、朝廷に手向う者に対して征討してきたゆえに、それぞれの代の乱れはなかったけれども、保元・平治の両乱によって源氏が滅んだ後は、平家一門のみが繁栄を極めたというのである。その繁栄は、左右の大臣をはじめとして高位高官を占め、平

家知行の国も日本全体の半ばを越え、平大納言時忠をして「此一門にあらざらむ人は皆人非人なるべし」(巻一・「禿髪」と言わしめるほどのものであった。

ところで、そのような平家一門の繁栄に対して、「いかならむ末の代までも何事かあらむとぞみえし」と語っている。平家一門の繁栄は末々の世までも永久に続き、何事もなかりうと思われたものである。この一文は、どうかすると、平家一門の繁栄が永久に続くように見えたという、至極当然のことを語っているものとして、受けとりがちである。しかし、その永久に続くように見えた平家の繁栄について、「……とぞみえし」と語ることに注目すべきである。

「とぞみえし」とは、「……と見えた」・「……と思われた」ということであるが、これは、その裏に「実はそうではなかった」という逆の現象を語っているのである。「……と見えた」・「……と思われた」のであって、見えた対象は実はそうではなかったのである。一見そのように見えたけれども、実はそうではなかったということをするのである。周知の如く、平家の栄華は永久には続かず、それどころかわずか三十年ほどで平家は滅び去ったのであるから、平家滅亡の事実を知る作者が、平家の繁栄に対して「……とぞみえし」と語することは、至極当然のことであると言えよう。たしかにその通りであるが、しかしまた、『平家物語』全篇を底流する無常観に照らし合わせてみると、この「……とぞみえし」という表現は、単に『平家物語』の平家滅亡後の成立を証するだけにとどまらず、さらに深い感慨をもって受けとめられるのではないか。すなわち、『平家物語』冒頭の

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰のことはりをあらはす。おごれる人も

久しからず、只春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ。

(卷一・「祇園精舎」)

において語られる無常観に基づいて事象を捉えた表現が、「……とぞみえし」なのである。

以下、この視点から、『平家物語』における「……とぞみえし」について、その類似表現も含めて検討してみたい。

一

仁安三年三月廿日、新帝大極殿にして御即位あり。此君の位につかせ給ぬるは、いよく平家の栄花とぞみえし。

(卷一・「東宮立」)

入道相国清盛の北の方二位殿の妹である建春門院の生んだ高倉天皇が即位し、平家は外戚として権力を握った。これからいよいよ平家が繁栄していこうとしていることについて、「いよいよ平家の栄華の世である」と語らず、「と見えた」と語る。つまり、平家の栄華の世であるかに見えたというのである。その裏には、平家の栄華がやがて滅びへと進んでいったことを語っているのである。

すべて此大臣は、滅罪生善の御心ざしふかうおはしければ、當来の浮沈をなげいて、東山の麓に、六八弘誓の願になぞらへて、四十八間の精舎をたて、……(中略)……誠に来迎引摂の願もこの所に影向をたれ、撰取

不捨の光も此大臣を照し給ふとぞみえし。

(卷三・「燈爐之沙汰」)

小松大臣重盛は東山に四十八間の御堂を建て、二百八十八人の「時衆」に不断念佛を唱えさせた。この行為によって、重盛は弥陀の摂取不捨の慈悲にあずかるであろうと思われるという。摂取不捨とは阿弥陀仏が人を救って捨てないことであり、それは死後、極楽に往生することをも含むものであるが、ここは、重盛が弥陀の摂取不捨の慈悲にあずかって栄耀栄華を極めるであろうということを語る。しかし、重盛は四十三歳で没する。ゆえに「……とぞみえし」なのである。つまり、四十八間の御堂を建立し不断念佛を修めさせた重盛は、事實は早逝してしまったのであり、弥陀の慈悲によって天寿を全うし栄華を極めるであろうと、まさに思われたのである。

春宮位につかせ給ひしかば、入道相国夫婦ともに外祖父外祖母とて、准三后の宣旨をかうぶり、年元年爵を給は(ッ)て、上日のものをめしつかふ。絵かき花つけたる侍共いで入て、ひとへに院宮のごとくにてぞ有ける。出家人道の後も栄華はつきせずとぞみえし。

(卷四・「厳島御幸」)

強引に高倉帝から安德帝に譲位させた清盛は、夫婦共々いよいよ栄華を誇り、その屋敷はまるで上皇や宮の御所のようにであった。これについて作者は、清盛が出家人道した後もその栄華は尽きることない「とぞみえし」と語る。やはり、そのように見えた清盛も「あつち死に」し、二位殿も壇の浦で入水したのであって、その栄華は尽きることなく見えたのであった。

平家やがて加賀に打越て、林・富樫が城柳二ヶ所焼はらふ。なに面をむかふべしとも見えざりけり。

(卷七・「火打合戦」)

越前国の火打が城にこもる義仲軍に対して、内通者がいたこともあって、平家はこれを打ち破り、さらに加賀へと進んだ。この平家軍の勢いに対しては、どんな者も立ち向かうとも思われなかったという。ここは今までの例と異なり、打消の助動詞を伴ってはいいるが、「何者も立ち向かう者はなかったと思われた」というのと同意であり、やはり、平家軍の勢いは向かう所敵なしといった状態に思われたのであって、その裏には、やがて平家が滅び去ることを暗示している。

去四月十七日、十萬余騎にて都を立ちしともみえざりしに、今五月下旬に歸りのぼるには其勢わづかに二萬余騎

(卷七・「実盛」)

これも直前の用例と同じものであるが、直下の文が、実はそのように見えただけであつたことを明示している。惣じて源平乱あひ、入かへく、名のりかへくおめきさけぶ声、山をひゞかし、馬の馳ちがふ音はいかづちの如し。……(中略)……いづれひまありとも見えざりけり。

(卷九・「坂落」)

生田の森で源平が大手で戦っている様子について、源平のいづれにも敵が乗じるすきがあるとは思われなかったというのである。敵が乗じるすきがあくまでもなかったというのではなく、すきがないと思われたのである。この戦いは、搦手の義経が一の谷の後方の鶴越から攻め込んだために、平家は総崩れとなつたのであり、敵の乗じるすきがないと思われた平家にも、実は乗じられるすきがあつたのである。

この例と同様な用例は、

其後源平たがひに命をおします、おめきさけんでせめたゝかふ。いづれおとれりとも見えず。

(卷十一・「遠矢」)

にもみられる。壇の浦での戦いの描写であるが、やはり、源平のいずれが劣っているとも見えなかったというのである。もちろん、結果は源氏の勝利に終わったのであり、平家が源氏に劣っているとは見えなかっただけである。

かくて室山・水嶋、ところどころのたゞかひに勝しかば、人々すこし色をなを（ッ）て見えさぶらひし程に

(灌頂卷・「六道之沙汰」)

大原の寂光院まで訪れられた後白河法皇に対して建礼門院がみずからの生涯を語る場面である。都落ちしていく平家も、室山・水嶋の合戦に勝利した時は生氣を取り戻したように見えたというのである。もちろん、やがて平家は壇の浦での滅亡へと進んでいったことはいまでもない。取り戻した生氣は、実は取り戻したように見えただけであったのである。

以上、「……とぞ見えし」及びその類似表現について、主に平家の滅亡を念頭においた用例を挙げた。それらは、程度の差こそあれ、その表現の裏に平家の滅亡を暗示した表現となっているのである。平家の栄華やその勢いを語りつつも、それは表面的なことであって、実はそうではなかったということをや裏に含んだ表現として、「……とぞ見えし」やその類似表現が用いられているのである。

次に、直接に平家滅亡を前提とした事柄ではないが、やはり「……と見えたが、実はそうではなかった」という意味において用いられている例をみてみたい。

彼大楯に雷おちかゝり、雷火飢うもえあが（ツ）て、宮中既にあやうくみえけるを、（巻一・「鹿谷」）

落雷によって宮中は焼亡するかに見えたというのであって、焼亡してしまっただけではない。

（時忠は）既にかうとみえられけるに、（巻一・「内裏炎上」）

これは、山門の衆徒に囲まれた時忠が今はこれまでと見えたというのであるが、時忠は一筆書いて衆徒の怒りをおさめ、命拾いしたのである。

同七月廿八日、小松殿出家し給ぬ。法名は淨蓮とこそつき給へ。やがて八月一日、臨終正念に住して失給ぬ。御年四十三、世はさかりとみえつるに、哀なりし事共也。（巻三・「医師問答」）

重盛はまだ四十三歳で、盛りの年令に見えたのに亡くなってしまったのであり、盛りの年令であつたのではない。

（高倉上皇は）宗廟・八わた・賀茂な（ン）どをさしをいて、はるゝと安芸国までの御幸をば、神明もなか御納受なかるべき。御願成就うたがひなしとぞみえたりける。（巻四・「厳島御幸」）

高倉上皇が、清盛の心を和らげ後白河法皇を鳥羽殿から救うために、嚴島神社に参詣される。伊勢・石清水八幡・賀茂の各社をさしおいて、はるばると嚴島まで参詣されたことを神が納受されて、上皇の御願も成就まぢがいなしと思われた、と語るのである。たしかに後白河法皇はやがて鳥羽殿から出なせることができたが、その後の後白河法皇と清盛との確執は周知の如きものであった。高倉上皇の嚴島参詣の御利益も水泡に帰したのである。

「然者則日本の外、新羅・百濟・高麗・荆旦、雲のはて、海のはてまでも、行幸の御供仕て、いかにもなり候はん」と、異口同音に申ければ、人々皆たのもし氣にぞみえられける。

(卷七・「福原落」)

これは、福原に着いた平家が、宗盛を中心として、安德幼帝の御伴をしてどこまでも結束することを誓う場面である。野の末、山の奥までも、どこまでも帝の御供をしていこうと呼びかける宗盛に対して、侍たちはどこまでもついていこうと異口同音に答えたが、平家の身分ある人々にとって、それは頼もしげに見えなかつたのである。しかし、これほど頼もしげに見えた侍たちの力も及ばず、平家は滅び去っていくわけであり、頼もしげに見えたのであって、頼もしいという言葉通りの結果になつたのではなかつた。

おとどし先帝の御禊の行幸には、平家の内大臣宗盛公節下にておはせしが、節下のおく屋につき、前に龍の旗たててみ給ひたりし景氣、冠ぎは、袖のかゝり、表袴のすそまでもことにすぐれてみえ給へり。

(卷十・「藤戸」)

都では大嘗会が行なわれ、源氏も供奉を勤めたが、それに関して、一昨年（建久元年）の御禊の際、宗盛が節下を勤めたことを回想し、その宗盛の姿がすばらしく見えたというのである。たしかにその時の宗盛の姿はすばしかったであらう。

うが、今は源氏に追われて瀬戸の海上にあるのであり、宗盛のすばらしく見えた姿も永久に続くものではなく、ほんの一時の華やかさにすぎなかったのである。このことをふまえて回想し、その時はすばらしく見えたが、今はその華やかさもないという意味をこめて「見え給へり」と語るのである。

（能登守教経は）いまはかうとおもはれければ、太刀長刀海へなげいれ、甲もぬいですてられけり。鎧の草摺かなぐりすて、どうばかりきて、おほ童になり、おほ手をひろげてたゝれたり。凡あたりをはら（ッ）てぞ見えたりける。

（卷十一・「能登殿最期」）

壇の浦の合戦の場面、能登守教経の威勢ある姿を描写しているが、それほどのすごさを見せる教経も、入水して果てるのである。つまり、死など逃げていくほどの威勢も、そのように見えたのであって、実際は死んでいくのである。

直接に平家の滅亡と結びついていない用例はまだ他にもあるが、大事小事の違いはあるものの、いずれも、前節の用例同様、「……と見えたが、実際はそうではなかった」という意味で語られているのである。

三

もちろん、「……とぞ見えし」及びその類似表現すべてがその裏に逆の実態を含むものであるわけではない。このことは次の用例からもわかる。

「とぞ見えし」考

・火のほのぐらき方にむか（ッ）て、やはら此刀をぬき出し、鬘にひきあてられけるが氷な（ン）どの様にみえける。

（卷一・「殿上闇討」）

・京師の長吏是が為に目を側とみえけり。

（卷一・「禿髪」）

・歌堂舞閣の基、魚龍爵馬の翫もの、恐くは帝闕も仙洞も是にはすぎじとぞみえし。

（卷一・「吾身栄花」）

・是偏に天魔の所為とぞみえし。

（卷一・「鹿谷」）

・所はひろし勢は少し、まばらにこそみえたりけれ。

（卷一・「御輿振」）

・比叡山より大なる猿どもが二三千おりくだり、手（ン）々に松火をともして京中をやくとぞ、人の夢にはみえたりける。

（卷一・「内裏炎上」）

・文殊樓の軒端のしろぐとしてみえけるを、

（卷二・「座主流」）

・兵杖を帶したる者共も、皆そざろいてぞみえける。

（卷二・「小教訓」）

・聖徳太子十七ヶ條の御憲法に、「人皆心あり、……（中略）……かへ（ッ）て我とがをおそれよ」とこそみえ給へ。

（卷二・「教訓狀」）

・いまだ遠からぬふねなれ共、涙に暮てみえざりければ、

（卷三・「足摺」）

・彼松浦さよ姫がもろこし船をしたひつゝ、ひれふりけむも、是には過ぎじとぞみえし。

（卷三・「足摺」）

・互にすがたを見もし見えむ。

（卷八・「緒環」）

・あれに見え候、粟津の松原と申。

（卷九・「木曾最期」）

多くの用例を挙げたが、実はかように「……のように見えたが、実はそうではなかった」という意味の用例の方が、極めて少ない。今、その状況を表に示すと、表1の如くなる。^②

表1 『平家物語』における「見え」の用例数

巻	頁数	A	B	C	D	計
一	五八	三	一	一三	二	一九
二	六八	〇	〇	九	四	一三
三	六〇	〇	〇	四	四	八
四	六二	一	四	一五	一六	三六
五	五五	〇	〇	一一	二	一三
六	四七	一	〇	一一	四	一六
七	五七	二	一	二三	七	二三
八	四六	〇	二	四	六	一二
九	七三	一	一	八	四	一四
十	六五	〇	二	八	一三	二三

十一	七八	〇	二	一二	九	二三
十二	四四	〇	〇	四	一四	一八
灌頂	二一	一	〇	六	四	一一
計	七三四	九	一三	一一八	八九	二二九

これを見ると、「……と見えしたが、実はそうではなかった」という意味での用例のうち、平家の栄華を語りながら実は平家滅亡を前提としたもの（A）は、わずかに九例であり、同様の意味ながら平家の栄華について語るものではない用例（B）を合わせても二十二例にしかない。「見え」の用例二二九例のほぼ一割である。つまり、「……と見えしたが、実はそうではなかった」という意味での用例は、「見え」の用例中、極めて少ないのである。

しかし、私には、用例の少なさよりも、平家の栄華及びそれに近い事柄を語るのに「……とぞ見えし」もしくはその類似表現を用いていることの意味を重く考えるのである。この点については後に述べる。

また、「……とぞ見えし」のように、過去もしくは完了を伴った用例（C）が「見え」の全用例中の半数を超えていることにも興味を覚えるし、各々の用例の数が巻毎にアンバランスであることにも注目する。さらに、今、考察の対象とした用例は「見ゆ」の未然形及び連用形であるが、終止形・連体形・已然形・命令形の用例はすべて現在形で用いられている。これらの点については、次の機会を期したい。

ちなみに、『保元物語』及び『平治物語』についてみてみると、表2・表3の如くなる。^⑧

表2 『保元物語』における「見え」の用例数

巻	頁数	A	B	C	D	計
上	四四	一	一	八	四	一四
中	五二	〇	一	七	四	一二
下	三六	〇	〇	三	五	八
計	一三二	一	二	一八	一三	三四

表3 『平治物語』における「見え」の用例数

巻	頁数	A	B	C	D	計
上	三三	一	一	一一	三	一六
中	三五	二	〇	一三	四	一九
下	三七	〇	〇	四	二	六
計	一〇五	三	一	二八	九	四一

やはり、「……と見たが、実はそうではなかった」という意味の用例は、『保元物語』・『平治物語』ともに全体の約一割であり、『平家物語』と同様である。また、過去もしくは完了を伴って用いられている用例も、『平

『家物語』と同様に全体の五割を超えている。さらに、『保元物語』では「見ゆ」の連体形・已然形が一例ずつ計二例あり、『平治物語』では終止形・連体形が合わせて四例あるが、すべて現在形で用いられている点も『平家物語』と同様である。

「……と見えたが、実はそうではなかった」という意味での用例を挙げておく。

(為義は) 三郎先生義憲……(中略) ……八郎為朝、九郎為仲以上七人の子共あひぐして、院の御所へぞ参ける。御所中ざゝめきあひ、上下力つきてぞみえし。〔『保元物語』上・「新院為義を召さるる事」〕

為義が七人の子供を率いて崇徳上皇の御所へ参上したところ、御所中がわきかえって、いかにも勢強くなったように見えたというのである。しかし、そのように見えたのも一時のことであって、周知の如く崇徳上皇方は敗れ去ったのである。

・弓矢をとつて、天竺・震旦はしらず、日本我朝に、義朝の一類にまさる者あるべしとはみえざりけり。

〔『平治物語』上・「源氏勢汰への事」〕

・やがて除目をこなはれ、清盛は正三位し給。……(中略) ……いよく平家の栄とぞみえられける。

(同・中・「謀反人流罪付けたり官軍除目の事並びに信西子息達遠流の事」)

前者は、平治の乱勃発寸前、内裏に勢揃いした軍勢について語るところであるが、日本に義朝の一族にまさる者があるとは見えなかった、つまり、まさる者はないと見えたというのである。しかし、義朝をはじめとして源氏は、平家によって敗走させられたのである。

後者は、平治の乱が鎮まり、謀反人の多くは流罪に処せられ、勝者の平家は清盛をはじめとして多くの人が昇進したことに於いて語るところである。平家がますます栄華へと進むように見えたのであるが、実際には源氏によって滅ぼされたのである。

結

以上、『平家物語』における「……とぞ見えし」及びその類似表現のうち、「……と見えたが、実はそうではなかった」「実際はそうではなかったのに、……と思われた」という意味の用例について考察してきた。そして、この表現は、単に『平家物語』の平家滅亡後の成立を示すのみにとどまらず、『平家物語』全篇を底流する無常観と密接な関わりを持った表現であると考えられるのである。

『平家物語』の無常観は、序章たる「祇園精舎」に語られている。

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色、盛者必衰のことはりをあらはす。おごれる人も久しからず、只春の世の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ。偏に風の前の塵に同じ。（卷一・祇園精舎）
古来夙に人口に膾炙した著名な文章であるが、ここに語られている無常観は、いわゆる一般的な「常なるものは何一つ存在しない」といっただけの単純なものではない。それは「盛者必衰」の句の出典たる『仁王経』護国品

有^ハ本^{ヨリ}目^シ無

因縁成^スレ諸^ヲ

盛^{ナル}者^ハ必^ズ衰^ヘ

実^{ナル}者^ハ必^ズ虚^シ

衆生蠢々^{トシテ}

都^テ如^シ幻居^ノ

という章句の語るところ、すなわち、在ると思われるものも実はないのであり、ただ在るように見えるだけである、従って、この世に在る（と思われる）ものが滅び無くなるのは必然である、というものである。そのことは「春の夜の夢」「風の前の塵」という比喩が何よりも物語っている。つまり、「春の夜の夢」はまだ醒めていないが、次の瞬間には目覚めて夢は消え去る。「風の前の塵」もまだ風に飛ばされていない。しかし、次の瞬間には跡形もなく飛ばされてしまうのである。^④

『平家物語』の無常観をこのように捉えうる時、以下の清盛をはじめとする多くの人々の「生」およびその先の「死」は、その実証のすがたであると言えよう。

このように『平家物語』の無常観は捉えうる。とすれば、「……とぞ見えし」及びその類似表現が「……と見えだが、実はそうではなかった」という意味で語られるのは、まさに『平家物語』全篇を底流する無常観と軌を一にするものである。特に、語られる対象が平家の栄華である時、その無常観は享受者に一層の感慨をもたらすのである。すなわち、「……とぞ見えし」及びその類似表現は、平家滅亡という結果を承知していたゆえのみの表現では、

決してないのである。それは享受者にさらなる感慨をもたらし、ひいては『平家物語』の感動へとつながっていくものである。^⑤

「……とぞ見えし」と同じような表現に「……とぞおぼえし」及びその類似表現があるが、紙幅の関係から、次の機会に譲ることとする。

注

① 『平家物語』は、寛一本系統の一本である龍谷大学本を底本とする、岩波古典文学大系本をテキストとする。以下、巻数・頁数も同じ。

② 金田一春彦・清水功・近藤政美各氏編『平家物語総索引』（学習研究社）を参照した。

表中、Aは「……と見えしたが、実はそうではなかった」という意味での用例のうち、平家の栄華を語るもの

Bは、同様の意味ながら平家の栄華について語るものではないもの

Cは、過去もしくは完了を伴ったもの

Dは、現在形で語られているもの

である。また「……とぞ見えし」を基本とした考察のため、「見ゆ」の未然形・連用形の「見え」を対象とした。

③ 岩波古典文学大系『保元物語・平治物語』をテキストとした。また、『保元物語総索引』・『平治物語総索引』（ともに坂詰力治・見野久幸両氏編・武蔵野書院）を参照した。表中のA～Dは②に同じ。

④ このあたり、渡辺貞麿先生著『平家物語の思想』（平成元年三月・法蔵館）に導かれるところ、大である。

⑤ 拙稿「『死』への想い——『平家物語』の語るもの——」（『同朋大学論叢』第六十二号所収・一九九〇年六月）を参照されたい。